

農作物技術情報 第7号 畜産

発行日 令和7年9月25日
発行 岩手県、岩手県農作物気象災害防止対策本部
編集 岩手県農林水産部農業普及技術課 農業革新支援担当（電話 0197-68-4435）

携帯電話用
二次元コード



「いわてアグリベンチャーネット」からご覧になれます
パソコン、携帯電話から「<https://www.pref.iwate.jp/agri/i-agri/>」

- ◆ 飼料用とうもろこし 収穫最盛期を迎えています。切断長、踏圧密度に留意して、安全に収穫調製を行いましょう。
- ◆ 牧 草 オーチャードグラスは刈取危険帯を避けて秋施肥を行い、翌春の収量確保のための分けつを促しましょう。
- ◆ 大 家 畜 牛の蹄を観察して、体調管理に役立てましょう。子牛の寒冷対策を始めましょう。

1 飼料用とうもろこし

(1) 生育状況

7月の干ばつにより、子実の充実や茎葉の生育停滞が心配されましたが、8月の降雨により、子実、茎葉の生育も平年並みとなってきました。水分の減少が緩慢な傾向にありますが、黄熟期を迎えており、収穫が始まっています。

(2) 収穫の留意点

子実が黄熟期に達し水分が50%程度、全体の水分が70%程度になると収穫適期です。

家畜の消化率とサイロへの詰め込み密度を高めるため、収穫時の切断長を10mm未満とします。コンクラッシャによる破碎処理を行う場合は、切断長を19mm、ローラーの間隙を黄熟期5mm、黄熟期以降は3mmとします。

過度の刈り遅れやすす紋病等の病害発生、霜にあたったとうもろこしは、水分含量が低く、貯蔵期間中のカビの発生やサイレージの開封後に好気的変敗が起りやすくなります。このような場合は、ギ酸やプロピオン酸など添加剤の使用を検討します。強風等により倒伏した場合は、作業機の走行速度を遅くし、倒れた方向に対して斜め後ろから進入します。また、高刈りして土壌の混入を避け、十分な踏圧と早期密封に努め、発酵品質の低下を防ぎます。

2 牧草

(1) 生育状況

7月の少雨により、一部ほ場で夏枯れや生育の停滞がみられましたが、8月の降雨により回復しつつあります。

収穫は8月下旬から始まっていますが、収量はやや不良から例年並みの見込みです。

(2) 寒地型牧草の秋の管理

気温が低下してくると、牧草は越冬のために茎葉基部（刈株）などに養分を蓄積します。この時期に施肥や刈取りを行うと、越冬のための養分が不足し翌年の1番草が減収するので、刈取危険帯を避けて刈取り等を行います（表1）。

(3) オーチャードグラスの秋施肥

オーチャードグラスは、秋に新分けつを旺盛に発生させるため、秋の最終刈取後に窒素で4kg/10aを上限に追肥して翌年の1番草の収量を確保します。この場合は、(2)の刈取危険帯よりも前に追肥します。

なお、チモシーは、1番草刈取後に分けつを旺盛に発生させるため、秋の追肥は効果がありません。

表 1 地域別の刈取危険帯の目安（2023～2024 年の 2 か年平均）

	刈取危険帯※ の目安	参考
		平均気温が 5℃以下となる日 (気象庁データより)
奥中山	10 月上旬～11 月上旬	11 月 8 日
盛岡	10 月中旬～11 月中旬	11 月 20 日
久慈	10 月中旬～11 月中旬	11 月 12 日
江刺	10 月下旬～11 月下旬	11 月 25 日
一関	10 月下旬～11 月下旬	11 月 25 日

※生育停止点（平均気温が 5℃以下になる日）から遡った約 30 日間

3 牛の飼養管理

秋になり、夏バテの症状が深刻になる場合があります。牛群をよく観察し、疾病の予兆を早めに見つけ適切に処置します。

暑熱対策も継続し、体内に熱が籠らないように送風や換気を徹底します。

(1) ルーメンアシドーシスに注意

蹄冠部に赤みがある場合は、アシドーシス（過剰な穀類給与、繊維不足によりルーメンが酸性化）を発症している可能性があるため、管理を見直します。ルーメン pH が下がると、微生物が死滅する際に発生したエンドトキシンにより角質の形成が減少して蹄壁にスジが現れ、蹄葉炎を発症するといわれています。

慢性的なルーメンアシドーシスの回避のため、飲水量の確保、良質粗飼料の給与、デンプン濃度の調整、重曹、ビタミン類の補強などを再確認します。

(2) 定期的な削蹄

牛の蹄は月に 5mm 伸びると言われます。蹄が伸びすぎると加重位置が変わり、血流が悪化し蹄の角質がもろくなり、細菌感染を引き起こします。蹄骨などの深い部分にまで感染が広がると蹄底潰瘍となります。

年に 1～2 回、乾乳期や泌乳ピーク後をめどに削蹄を行います。起立した姿勢、歩行時の状態をよく観察し、問題がある場合は、早めに獣医師や削蹄師に処置を依頼します。

4 子牛の管理

9 月下旬から夜間は 13℃を下回るようになり、子牛は寒い夜を過ごしています。哺乳期の子牛は、体熱がうまく作れない時期なので、防寒対策を行い、子牛にとって快適な温度「13～25℃」を目指します。

乾いた敷料（ワラなど）を、寝てほしい場所にたっぷり入れる、糞尿で汚れた敷料は、毎日除去して牛体をぬらさない、バスマットを敷く、寝床は L 型に 2 方向の壁を設置する、空の洗剤ボトルなどで湯たんぽを作って寝床に入れます。

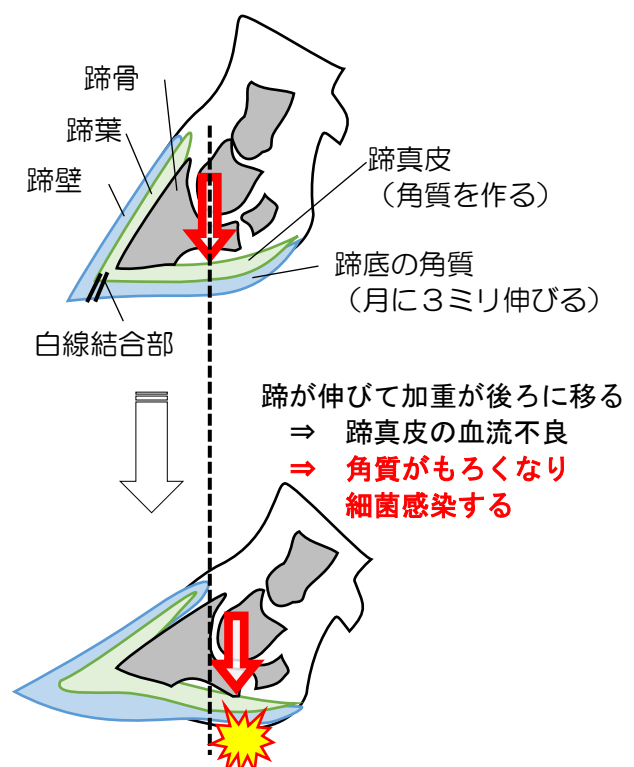


図 1 蹄底潰瘍の機序



バスマットが、床からの冷気を遮断



図2 防寒対策：バスマット敷設

次号は10月30日（木）発行の予定です。気象や作物の生育状況により号外を発行することがあります。
発行時点での最新情報に基づいて作成しております。発行日を確認のうえ、必ず最新情報をご利用下さい。

**9月15日～11月15日は
秋の農作業安全月間です**

**忘れずに！点検・確認・安全管理
無事故で終える収穫作業**

農業普及技術課農業革新支援担当は、農業改良普及センターを通じて農業者に対する支援活動を展開しています。